

## 色彩應用論 (三)

榕村主人

### 樹木 (下)

樹木の色は非常に種類が多くて、或物の如きは、緑といふは名のみの鼠や紫が大部分を占むるものがある。縦族の如きこれである。全鉢に暗いので、日光に照されても、光部が中和色である。遠方に於ても全じてある。この色を描くには半不透明色を用ゐる。

例之は輪を描くとすれば、最初に充分な豊富な色彩を以て描いて、寧ろ固い位にする。木の葉を仕上くるには、最大暗所と最高明所は素の如く存して置くのである。で色彩を種々の度で施すので、木葉の紛雜なる様が増して來るのである。そこで枝を描くのである。この傳色には生命と眞實とがなければならぬ。もし木葉が餘り明白で、強い確な色や蔭影であると、木葉よりも枝が前方へ出るやうになる。もし不正確にすれば、木が重く偏平となる。枝は幹から突出して、木葉の中を自由に縫ふて居つて、木葉の明所に見えるので、その色は木葉と光線とに依て、大部分の影響を受けるのである。木の枝も確に描き、木の葉の最高明所も出來した處で、其形を除去るといふことが、大いに助けとなり不透明となるのである。その法は水を塗つて、それを吸取紙で吸取つて濕氣ある處を、空の明るい方から木の葉の方へと拭ひ去るのである。かくすれば空を汚さずに仕上がる。拭ふものは布か護膜でよろしい。その中の或物は豊富な透明な色彩を再び塗る。他の物は猶冷い調子にする。それが木の葉や枝全鉢に、深いもしくは暖い色を加へて、影を透明さして、冷たみや黒みを除くのである。於之樹木が略完成に近づいたが、木の葉の先が固い。これを調和させるには水の筆で前の如くに拭ひ去るのである。それから下枝遠く見するには、フレンチブリューとレツドの種類とを重調すれば、やゝ冷い鼠の調子が出来る。

さて畫架を離れて、自然界を見るが如き、適度の距離で、今迄の骨折を忘れて、清新な公平な眼で觀察する。そ

の調子、感じ、表情等宜しきを得れば、木葉を通じて、閃光を興へる爲に、ペンナイフの先で紙を搔く、この方法で幹や枝の輪廓をより明かに顯はさすとも出来る。また最近の枝を前の方に突出すには、ペンナイフで搔くかまたはホワイトとネーブルスカレモンエローで描く。

樹木の蔭はその色彩と濃淡に依つて異なる。木の葉の單一なものや、または一團々々より生ずる明暗の關係は、初學者の判別に苦しむものである。壁に接近した木の葉の影は木の葉と同じ形であるが、一ヤードもしくは二ヤード離れた影は輪廓が不定である。角ばつたものが丸くなつて居る。それから極めて隔つて居る木の葉の影はその形が朦朧として見定め難い位である。如斯で近い影は角であれば、角に映るが、遠くなるに丸い形となる。これは明暗の原因である。太陽の外観の大きさによるのである。例之は月に五分位の丸い穴を穿ちて、光線を通すと、近い處では全じ大いさの丸い形が映るが、猶離れば離るゝ程影が朧になる。丸を三角に換ゆれば、近い時には全じてあるが、遠くなるに角が取れて映る。木葉の影もこれと同一理である。

さて綠色の種類に戻る。インヂゴは水彩畫に於て綠色を作るには最も必要な色である。時にはコバルトブリユーに少量のインヂゴを混する事もある。プレシアンブリユーは最明瞭で透明である。またフレンチブリユーやオルトラマリンを用ゆる事もある。インヂゴにガンボーヂを交ゆれば、氣持の好い自然の調子を得られる。インヂアンエローと交ゆれば、強い活潑な調子となるが少しく濁つて不透明の傾がある。この二色は夏期の色に適する。秋期の色にはバートンシーナを加へる。インヂゴとローシーナとで和かな不定の緑が得られる。水の最初に塗る色に必用である。

プレシアンブリユーやコバルトと交へると、調子が變じて純清で透明となる。クリムゾンレーキの少量を加へると、水に好くある不定の鼠の緑が得られる。

インヂゴとブラオンピンクとて、調子の充分透明な緑が得られる。ブルユーとエルーとの調合の度で、暖くも冷くもなる。しかし豊富な秋の調子を得んとには、透明色即ちガンボーヂ、ブラオンマダー、或はインヂ

